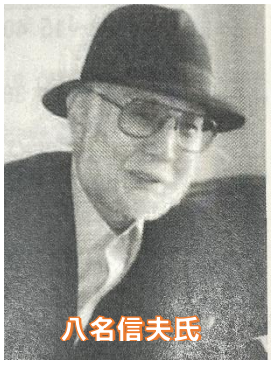
育成　あさくち

令和４年８月１５日　　No.48
浅口市青少年育成センター
お盆特別号

令和４年度岡山県少年補導（育成）関係者研修会

７月２９日（金）に備前市において、標記の研修会が開催され、本市からも指導員の方が多数参加されました。最初に岡山県出身の俳優（悪役で有名）八名信夫氏が講演され、その後で３市の実践発表がありました。この研修会もコロナ禍で２年間にわたり、開催出来ない状態が続いていましたが、今回やっと実現でき、我々も有意義な時間を過ごすことが出来ました。


八名信夫氏

八名さんは８６歳ということですが、驚くほどお元気で、子どもたちを励ます活動を積極的にされています。きっかけは、東日本大震災後に、ボランティアで現地に入った時、９歳くらいの子どもたちがサッカーボールを蹴っているのを見つけた時のこと。みんなを集めて『何が必要か、一番して欲しいのはなにか？』と聞いたら、重い口を開いたひとりの男の子が『僕は、津波では流されたおばあちゃんと妹を探して欲しい』と答えた。『聞くべきでなかった』と思うと同時に、食べ物より大切なものがあると思った。そこで、映画作りしか出来ない自分なので「人への思いやりの大切さや、家族の絆」を題材とした映画を作って、全国で上映した。また、熊本豪雨では災害に遭った人を、一軒一軒訪ねて、ドキュメンタリー映画を作った。

～心に残った言葉（小田先生）～

小学校の恩師（当時お寺の住職）に、俳優を続けるか家の後を継ごうか相談に行ったが、なかなか言いだせず、寺でじっと座っていた。すると背後から袈裟のにおいがして、住職の方から来てくれたと分かった。そして『お前いくつになった』と尋ねられ『五十を過ぎました』と答えたら『五十か･･･二十は二十、三十は三十、五十は五十、八十は八十の悩みがある･･･これが人生。悩みを持った全ての人間は、その悩みを乗り越える力を誰でも持っている。それを使うか使わないかだ。悩みがあるのが人生だ』と言われた。

～心に残った言葉（島岡監督）～

明治大学野球部の島岡監督は、年に一度だけ「卒業生を励ます会」をやってくれる。その会で監督は、卒業生の顔をゆっくり眺めて『お前ら、孫や子どもに言ってやれ･･･人に好かれるのはいいことだが、好かれようとして生きていくな。自分が思ったらすぐにやれ。すぐに汗を流せ。人がやるのを待つな』と･･･

講演後の実践発表は、真庭市、美作市、赤磐市の方が、それぞれの実践を発表されました。取り組みの内容は本市とほぼ同様で、非行の状況が年々減少していることも似ていました。パトロールをしていても、子どもたちに会うことが少なくなり、草取りなどの環境整備が中心になってしまっているという発表もありました。

印象的だったのは、質疑の時に美作市のＰＴＡ（保護者）の男性が質問した内容です。

① 現代における非行とは？
② 育成するとは？
③ もう少し別の方法で出来ないか？

私自身も同じことを考えていましたが、なかなか答えが浮かびません。

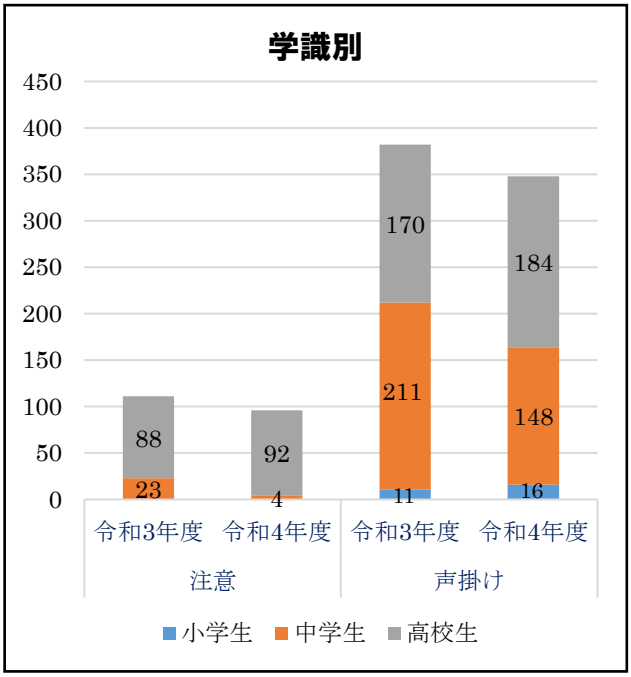
浅口市青少年の補導状況

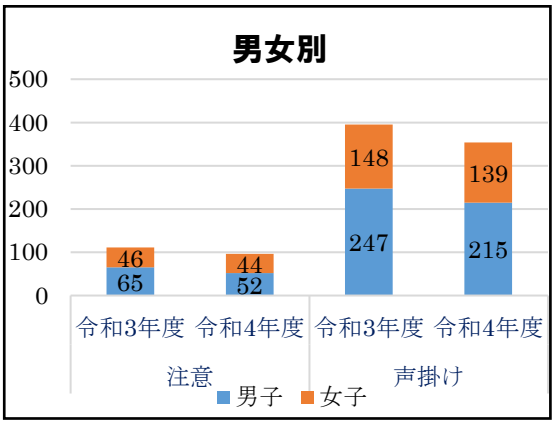
本年度４月から７月の補導状況の内、注意と声かけについて学識別と男女別で、昨年度と比較してみました。なお、注意・声かけ以外では校則違反の中学生男子が１名いるだけです。

《学識別の比較》

注意の学識別では、中学生は 23 人から４名と大幅に減少し、高校生は 88 名から 92 名に微増していいます。全体では 111 名から 96 名に減少しています。

声掛けでは小学生は 11 名から 16 名に増加し、中学生は 211 名から 148 名にと大きく減少し、高校生は 170 名から 184 名に若干増加しています。全体では 395 名から 354 名に減少しており、中学生が減少して、小学生・高校生が増加していると言えます。





《男女別の比較》

男女別では注意も声かけも、男女ともに僅かずつ減少しており、男女の比率もほとんど変わっていません。

なお、地域別では、金光地区は昨年も本年も注意は０名で、声かけが 70 名から 83 名に増加しています。鴨方地区は、注意が 108 名から 96 名に、声かけが 307 名から 268 名に減少しています。寄島地区は、注意が３名から０名に、声かけが 18 名から３名に減少しています。減少傾向が続いている理由は、非行が見えにくくなっているのか、形態が変化しているのか、検証の必要があります。

「親が子どもを叱ることの大切さについて」

《全国退職校長会調査・研究より》

以前にも紹介しましたが、調査結果のまとめが出ましたので、その一部を紹介します。

★「叱ること」「怒ること」の区別について

全体的に「叱るとは、理性的に諭すあるいは戒めること」「怒るとは、感情的・一方的に責めるあるいは咎めること」として区別し、子どもに対処していこうとしている親の姿勢が感じられる。

しかし、現実の家庭生活において叱らなければならない原因をはじめ、諸々の要因でこの区別が曖昧になることも多い。また子どもの受け止め方も、年齢が低いほど「叱られた」「怒られた」が一緒になってしまう。これらのことは、家族という関わりの中で、むしろ自然の姿であると言えよう。

以下のような記述を大切にしたい。

◎まず子どもの話を聞くことが大切と分かっているが、親が一方的に叱ることが多いと反省している。
◎子どもを追い詰める、抑え込むような叱り方なしないよう努力している。
◎叱った後のフォローも大切である。親が間違ったとき謝ったこともある。
◎「叱る」「怒る」は違うと分かっているが、真剣に叱っていると（あれ怒っているのかな）と思うことがある。しかしその時、子どもが真剣に聞いてくれたことも確かである。